

京都:Re-Search 2018 報告書



京丹後

福知山

亀岡

京田辺

京都:Re-Search 2018 報告書

2019年3月発行

京都:Re-Search 2018 in 京丹後 / 2018年8月20日(月)～9月2日(日)

京都:Re-Search 2018 in 亀岡 / 2019年2月25日(月)～3月10日(日)

大京都 2018 in 京田辺 / 2018年7月6日(金)～7月16日(月・祝)

大京都 2018 in 福知山 / 2018年11月2日(金)～11月11日(日)

京都:Re-Search フォーラム 2018 / 2019年1月12日(土)
「地域と向き合う～アーティストのサーチ～」

主催／京都:Re-Search 実行委員会(京都府、福知山市、京田辺市、亀岡市、京丹後市)
助成／損保ジャパン日本興亜「SOMPO アートファンド」(企業メセナ協議会 2021 Arts Fund)

発行
京都:Re-Search 実行委員会(京都府、福知山市、京田辺市、亀岡市、京丹後市)
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府文化スポーツ部文化芸術課内
TEL:075-414-4279 FAX:075-414-4223
Eメール:bungei@pref.kyoto.lg.jp

<http://kyoto-research.com/>

Copyright © 京都府

京都:Re-Search 2018 in

京丹後



8月20日から14日間、京都府内外で活動するアーティストが市内に滞在し、各自が設定したテーマに沿って、京丹後市の風土や歴史等を調査し、そこでの発見を活かしたアートプロジェクトや作品プランの構想を作成して、次年度にそのプランの実現を目指します。また、その記録をデータ化し、アートの視点による新しいドキュメントを作成します。国際的に活躍するアーティストやキュレーターたちから、リサーチの手法やアートプロジェクトの作り方を学ぶワークショップやフィールドワーク、参加者の調査へのアドバイスを受けました。



京都:Re-Search 2018 in 京丹後

参加アーティスト

石毛 健太／高橋 臨太郎／田中 良佑／前谷 開／鷺尾 怜

開催日時 2018年8月20日（月）～9月2日（日）

滞在場所 京都府京丹後市峰山町 「OGINO 邸」

プログラム

8月20日（月）	京丹後市内にて、SIDE COREによるガイダンス「アーティストにとってリサーチとは」を開催。
8月21日（火）	SIDE COREと京丹後市内をフィールドワーク。 その後、各参加者によるプレゼンテーションを実施し、SIDE CORE からアドバイスをもらう。
8月22日（水）～8月25日（土）	各自の計画により京丹後市内を調査し、アートプロジェクトや作品のプランを策定。
8月26日（日）	黒瀬陽平によるワークショップ「地域とアートプロジェクト」を実施。※1
8月27日（月）	中間報告を実施し、SIDE CORE からアドバイスをもらう。 その後、島袋道浩 ×SIDE COREによるワークショップ「折り返しディスカッション」を実施。※1
8月28日（火）～8月31日（金）	各自の計画により京丹後市内を調査し、アートプロジェクトや作品プランの構想を策定。
9月1日（土）	参加者の作品プランやプロジェクトのプレゼンテーションによる講評会及び活動報告展を開催。※2
9月1日（土）～9月2日（日）	参加者の活動報告展を実施。一般開放し多くの鑑賞者が訪れた。

※1 本プログラムでのワークショップとは、情報の交換や共有のみならず、アイデアの出し合いやディスカッションを繰り返し、各自が設定したテーマに沿ったアートプロジェクトや作品プランの実現に向けた戦略や施策などを固めていくものです。

※2 次年度、本プログラムで提案されたアートプロジェクトや作品プランをもとにした展覧会を伴うアーティスト・イン・レジデンス事業「大京都 2019 in 京丹後」の開催を京丹後市内で予定しています。

ホームページ <http://kyoto-research.com/kyotango2018>

京都府内では、交流人口の拡大、地域の活性化へ繋げるさまざまな取組を行っています。

その一つとして、アーティストが一定期間滞在し、地域で制作を行うアーティスト・イン・レジデンス事業「京都:Re-Search」、
「大京都」を実施し、地域が本来持ち得ているポテンシャルやその魅力をアートの視点から引き出すことを試みています。

2018年度は8月から9月にかけてと2019年2月から3月にかけて、京丹後市内で「京都:Re-Search 2018 in 京丹後」、
亀岡市内で「京都:Re-Search 2018 in 亀岡」を実施しました。

そして京田辺市内と福知山市内で「京都:Re-Search 2017 in 京田辺」、「京都:Re-Search 2017 in 福知山」のリサーチをもとに、5月から7月にかけてと9月から11月にかけて、地域の新しいアートドキュメント（＝記録）を作成する「大京都 2018 in 京田辺」、「大京都 2018 in 福知山」を開催しました。

1月には京都文化博物館別館にて、京都:Re-Search フォーラム「地域と向き合う～アーティストのリサーチ～」を開催しました。
今年度のフォーラムでは、アーティストのリサーチについて、また、その成果物としての作品やそのプロセスは地域に何をもたらすのかについて議論を深めました。

石毛健太 ISHIGE Kenta

「インターネットで拾える情報よりも、直接現地で出会う物事の方が重要だと思った。出会った人との場の空気や相手の挙動、話し口調などは、数値化したり、交換できるものではなかった。」



石毛健太

1994年東京都生まれ、在住。東京藝術大学大学院修士過程表現研究科壁画修了後、2018年よりURGとして都市論の再興をテーマに活動を開始。主な展覧会に「変容する周辺 近郊、団地」など。

「荒野の声 / The voice of wildness」

面と向かってコミュニケーションを取ることの重要性を再認識しながら、話を伺ったり、漂着物を収集して、リサーチを行った。来年実際に取り組む作品制作までに、スケッチを行いたい。

田中良佑 TANAKA Ryosuke

「京丹後にある『七姫伝説』から、細川ガラシャについてリサーチしていくうちに、彼女の溜め息のようなものが耳の傍でする気がして、僕は彼女の、時代を超えた『寂しさ』をもっと想像したいと思いました。」



田中良佑

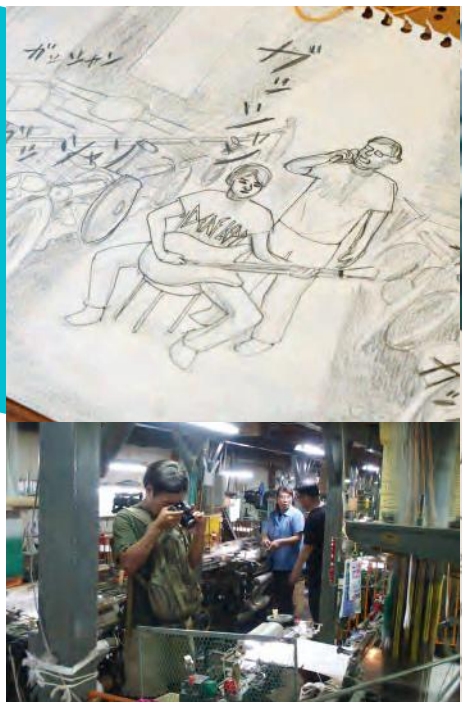
1990年香川県生まれ、東京都在住。東京藝術大学大学院修士課程美術研究科壁画専攻修了。「社会の中のそれぞれの『私』』という言葉大切に、この世界で生きるそれぞれの人生の可能性を探る。

「夜が嘆きに包まれても」

細川ガラシャが幽閉されていたという山奥の村「味土野」を訪れた。そこに移住して来たという元シスターの方のインタビュー映像を上映し、「昔」と「現代」の二人の女性のかすかに重なる部分についての想像を試みた。

高橋臨太郎 TAKAHASHI Rintaro

「丹後ちりめんに関わる人や、変わっていった風景をリサーチ。ユニークな地域の人たちとのコミュニケーションは、自分の思った通りになるはずもなく、想定外なことが次々と起こりました。」



高橋臨太郎

1991年東京都生まれ、在住。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程で美術を学ぶ。湖の漂流物を集めて湖面上に一時的に土地を作ったり、媒体や手法をあえて決めずに作品を制作する。

「Deaf leopard」

京丹後の伝統工芸品である「丹後ちりめん」をテーマに選んだ。たった2週間で、どのように地元の方と関係を築いていけるかが難しかったが、実際に自分でちりめんを織ることが出来たのは収穫である。

前谷開 MAETANI Kai

「古墳や古い石碑が残っている一方で、使われなくなり放置された建物を目にしたとき、京丹後の地理や歴史をふまえながら、現在の人々から忘れられようとしていることを作品化したいと思いました。」



前谷開

1988年愛媛県生まれ、京都府在住。京都造形芸術大学大学院芸術研究科表現専攻修了。自身の行為を変換し、確認するための方法として主に写真を使った作品制作を行う。

「Forget Every Remember Some」

京丹後にある古墳や遺跡、面する日本海を見て行くなかで、東アジア地域との交易や、京丹後の風土についてリサーチし、自分なりに理解していった。地域の外から来た自分が、この場所では何を見ることができているのか考えていきたい。



亀岡

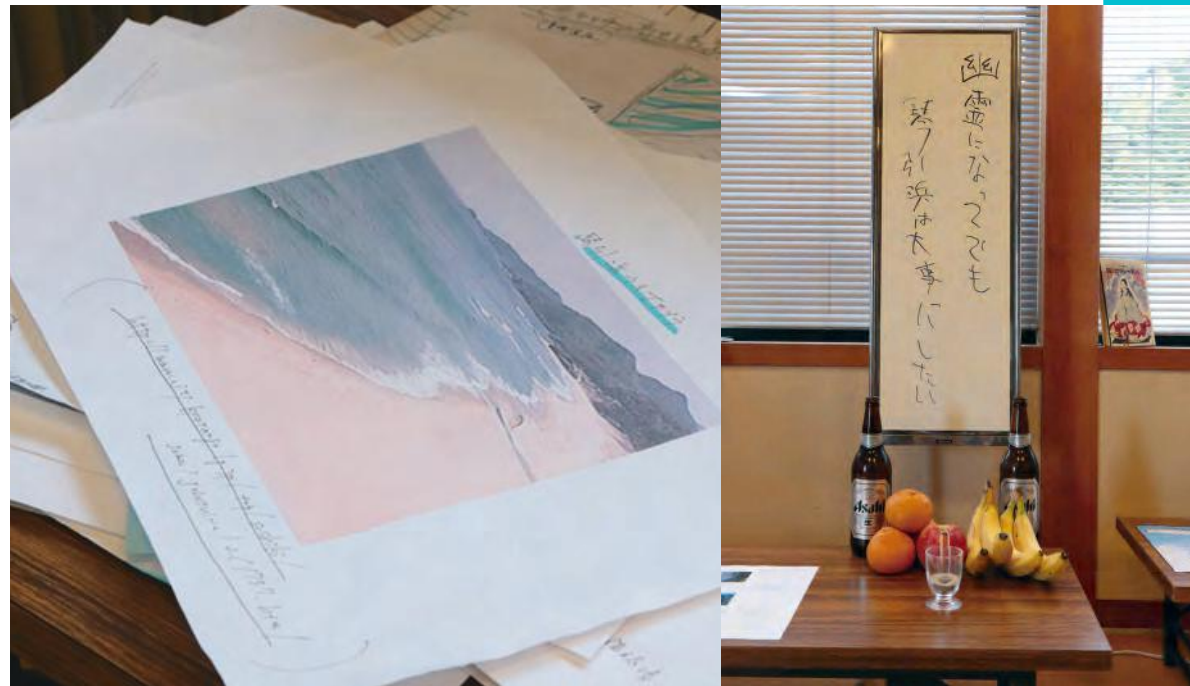
外部:Re-Search 2018 in



2月25日から14日間、京都府内外で活動するアーティストが市内に滞在し、各自が設定したテーマに沿って、亀岡市の風土や歴史等を調査し、そこでの発見を活かしたアートプロジェクトや作品プランの構想を作成して、次年度にそのプランの実現を目指します。また、その記録をデータ化し、アートの視点による新しいドキュメントを作成します。国際的に活躍するアーティストやキュレーターたちから、リサーチの手法やアートプロジェクトの作り方を学ぶワークショップやフィールドワーク、参加者の調査へのアドバイスを受けました。

鷺尾 怜 WASHIO RAY

「市内を散策しているうちに、その豊かな自然を生かした観光地のような空気を見い出せたので、観光地化によって失われたリアリティをテーマにすることにしました。」



幽霊になっても琴引浜は大事にしたい

違和感や虚構性のあるものに対して、外部である自分がどう介入したら、どんな衝突が起きるのかに興味を持って来た。今回、琴引浜鳴き砂文化館で売っていたお土産品の「鳴き砂」をモチーフに、それにまつわるストーリーを作品化する可能性を探った。



鷺尾 怜

1995年東京都生まれ、京都府在住。京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻で美術を学ぶ。違和感や虚構性のあるものに対して外部である自分がどう介入して、どんな衝突が起きるのかという興味から作品を制作する。

講師プロフィール

SIDE CORE アーティスト

2012年から高須咲恵と松下徹により活動を開始。美術史や日本の歴史を背景にストリートアートを読み解く展覧会『SIDE CORE - 日本美術と「ストリートの感性」-』を発表。その後、問題意識は歴史から現在の身体や都市に移行し、『SIDE CORE - 身体／媒体／グラフィティ -』(2013年)、『SIDE CORE - 公共圏の表現 -』(2014年)を発表。さらに2015年の『TOKYO WALK MAN』からは表現の場を、室内から実際のストリートへと広げる。ゲリラ的な作品を街に点在させ、建築や壁画、グラフィティを巡る『MIDNIGHT WALK tour』は、現在まで不定期に開催している。2017年より、西広太志がメンバーとなり、公共空間にある見えない制度に、遊びを交えた視覚化をするアプローチの手法が確立されていく。また、数々の展覧会に参加する一方、2016年からは東京の湾岸地域のスタジオ『BUCKLE KOBO』の運営に関わるなど、都市での表現のあり方を拡張し続けるアーティストたちが、流動的に参加できる場として、展覧会に留まらない活動を展開している。

黒瀬 陽平 美術家／美術批評家

1983年生まれ。ゲンロンカオス・ラウンジ新芸術校主任講師。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。博士(美術)。2010年から梅沢和木、藤城雄らとともにアーティストグループ「カオス・ラウンジ」を結成し、展覧会やイベントなどをキュレーションしている。主なキュレーション作品に『破壊「ラウンジ」』(2010年)、『カオス・イグザイル』(F/T11主催作品、2011年)、『キャラクラッシュ!』(2014年)、『カオス・ラウンジ新芸術祭2017「市街劇 百五〇年の孤独」』(2017年)など。著書に『情報社会の情念』(NHK出版、2013年)。

島袋 道浩 美術家

1969年神戸市生まれ。那覇市在住。1990年代初頭より国内外の多くの場所を旅し、そこに生きる人々や動物、風習や環境に関係したインスタレーションやパフォーマンス、ビデオ作品を制作している。パリのボンドー・センターやロンドンのハイワード・ギャラリーなどでのグループ展やヴェネチア・ビエンナーレ(2003/2017)、サンパウロ・ビエンナーレ(2006)などの国際展に多数参加。2004年から2016年まではドイツ、ベルリンを拠点にし、ドイツ、ブラウンシュヴァイク芸術大学やスイス、チューリッヒ芸術大学などで客員教授を務める。著書に「扉を開ける」(リトルモア)、絵本「キュウリの旅」(小学館)などがある。

身体0ベース運用法／安藤隆一郎

Shintai zero base Unyo-ho / ANDO Ryuichiro

「亀岡を流れる大堰川と上流部の丹波を繋ぐ物流の歴史について、師を見つけて弟子入りすることで、身体的に理解して行きたい。」



身体0ベース運用法 / 安藤隆一郎

1984年京都府生まれ、大阪府在住。身体0ベース運用法とは、染色作家安藤隆一郎による「ものづくりの視点」から様々な文化の身体を読み解き、現代生活への応用していく活動。医学やスポーツとは異なる新たな身体学としての可能性を探っている。



「山カラ川ヘト物流スル身体ノ弟子ニ入ル」

今後も現地に訪れながら山師や船頭さんから仕事にまつわる身体的な動きを学びトレーニング化していきます。また、現在の丹波林業や筏の終着地点であった嵐山から京都市内に木材を運んでいた西高瀬川についてリサーチを重ね、大堰川全体の物語をまとめていきたい。

上岡安里 KAMIOKA Asato

「石は何千年、何億年というながさの時間を持っている。その、ながい時間軸を持った石を焼きたい、と構想した。そしてリサーチを行い、私が分かったことは、この土地には人がいるということである。」



上岡安里

1995年東京都生まれ、石川県在住。金沢美術工芸大学美術工芸研究科修士課程で美術を学ぶ。「視覚では捉えられないものを捉えることが出来たときは、よろこびかどうか」を作品 / 制作のテーマとしている。



「石を焼くこと」

この街をリサーチしてわかった「人がいる」ということ。そして、人が存在するうえで必要な「水」と「太陽」。それらのことに着目した結果、この亀岡で「石を焼くこと」ができると考えた。そして、そのことを作品プランにした。

小野峰靖

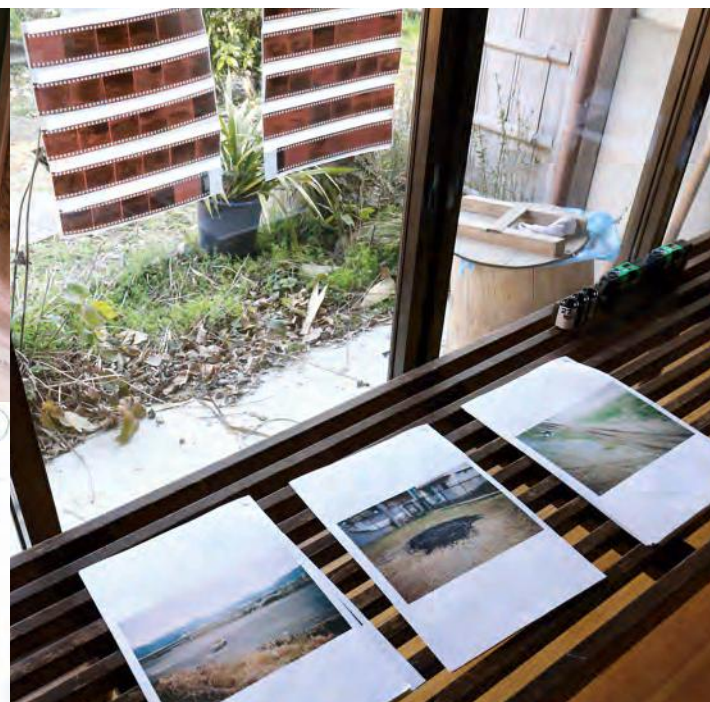
ONO Takayasu

「テーマを掲げず、街の日常に身を任せて動いていた。しかし近所で出会った人達と行動を共にしたことで、街の日常を知り、もっと参加したいと思った。」



小野峰靖

1989年大分県生まれ、在住。今日の自分が何を忘れていて、これから先何を忘れてしまうのか把握できない境遇において、目の前の情景を無責任に物質化できる写真の機能を「忘失のメディア」とみなし様々なフィールドで検証している。



「平和池は今日で忘れる」

より長く滞在し、街の人たちとより自然な関係性を作っていきたい。亀岡には「平和池」が存在していた「今日」があったはずで、しかし現在進行形の「今日」は平和池があった頃とは別の「位置」にあるような感覚があります。その感覚を作品化していきたい。

上川桂南恵

KAMIKAWA Kanae

「亀岡市は、故郷と地形がとても似ていて初レジデンスの場として親近感があり興味があつた。亀岡にすでにある魅力をとことん推した。」



上川桂南恵

熊本県出身。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科で美術を学ぶ。表現媒体は主に絵画。音楽、立体なども制作。幼少期から慣れ親しんだものや故郷熊本県に目を向けた作品を多く制作。モチーフに全身で憑依しながら作品制作を行う。



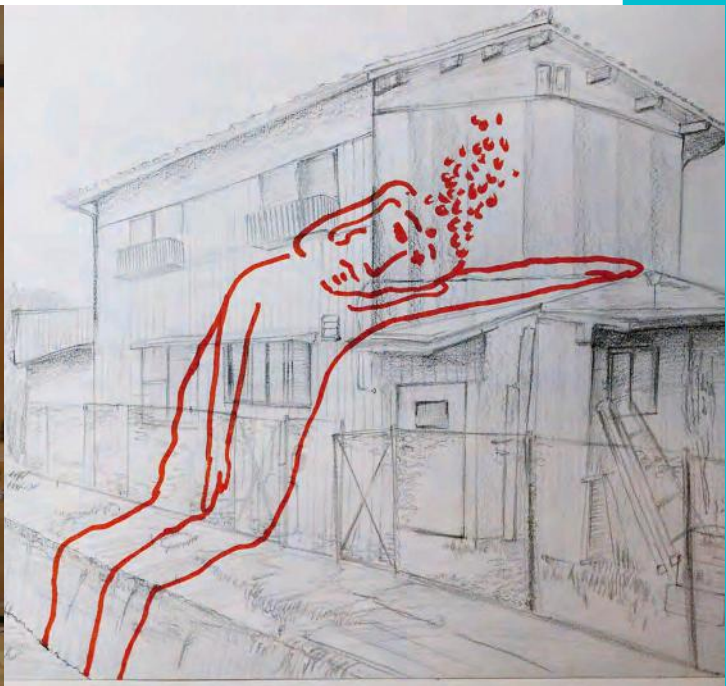
「亀岡愛」

レジデンス後から自宅の庭でチョロギを栽培し始めた。金の屏風に龍のようなチョロギが描けないかと模索中。チョロギ村で公開制作をする。かめまるくんを3000体あまり描いた絵を消書しポスターとして展開する。すでにある亀岡の魅力をとことん推したい。

倉科明尚

KURASHINA Akinao

「商店街の店に出来るだけ入り、いろんな話を聞いて回った。アニメーションが向いているかもしれないので、その方向で表現するかもしれない。」



倉科明尚

1998年東京都生まれ、茨城県在住。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科で美術を学ぶ。普段は絵を描いたり、折り紙にて制作。最近はアニメーションに挑戦している。



「亀岡の商店街にもし仏が休んでいたら」

商店街の店の人に今どんな雰囲気か、昔はどんな雰囲気だったか、これからどうしたいかなどを聞いて回った。そのような話を聞いているうちに、人がいないということをポジティブに考えられないだろうかと思うようになった。



中谷優希

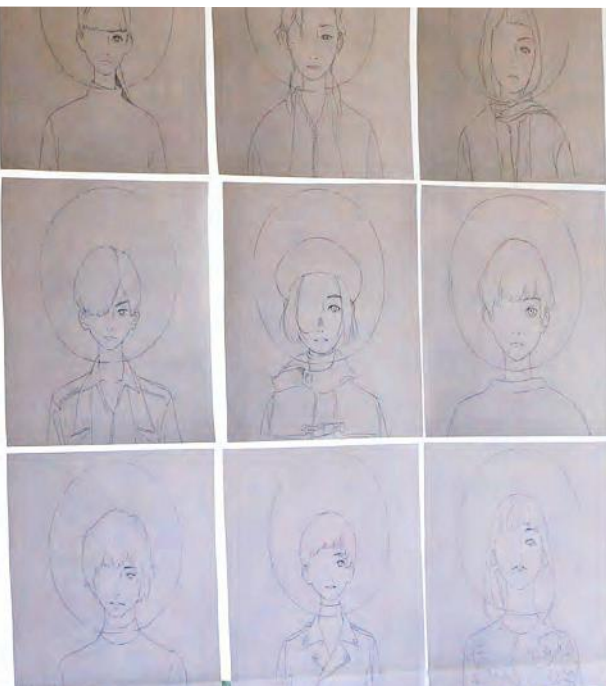
NAKAYA Yuki

「亀岡にとつての私はエイリアンである、つまり外から来た人間である。外から来ることの苦痛を越えて、その土地に留まる術をパッキング(包むこと)の特性から考えました。」



中谷優希

1996年北海道生まれ。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科で美術を学ぶ。ある現象から物語を展開させたインスタレーションや、絵画の身体を移植したパフォーマンス映像などを制作。



「alien」

レジデンス前半は場所性に留意して、亀岡に伝わる花踊り/丹波霧/馬路大納言について興味を持ち探求を進めた。後半はアーティスト・イン・レジデンスそのものについて疑問を感じ、自分は外から来た人間であるということから外部性について、またその場に留まるための方法としてのパッキングをテーマとした。

武田萌花

TAKEDA Moka

「それぞれの作品がこの街に強く響くような導線や展覧会としての魅せ方を考え抜くこと、それはこの場で私がアーティストとして作品をひとつ残すことと等しく、あるいはそれよりも極めて重要なことだと感じている。」



武田萌花

1997年東京都生まれ、東京都在住。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科で美術を学ぶ。インスタレーション作品と舞台表現のあいだ、あるいはそれらを超えた空間での表現を模索して作品を制作。



『「小盆地宇宙」循環していくアート』

報告展では、ささやかな企みとして入口に詩を添えた作品を展示した。亀岡盆地の「倒木」から作品プランも考えたが、それを個人のものとして発表するのだけではなく、他のメンバーや亀岡の街との関係性をしっかりと見定め、今後展覧会としてどうやって魅せることができるかを考える必要があると感じた。

「自給自足をしているお爺さんとの生活」

リサーチで出会った、自然との関わりが深い自給自足のお爺さんの、生活を疑似体験できるツアーや彼をモチーフにした土産品などを作っていきたい。今後お爺さんとより多く時間を過ごすことによって、具体的なプランを練っていく。



原田眞次郎

1986年神奈川県生まれ、兵庫県在住。神戸市内の市街地各所(賛同者の身近な場所)において葡萄の栽培を行い、収穫、ワインとして醸造を行う活動を主導している。



「普段からの関心事に焦点を当てながら、普段どおりの生活を送ることを心がけた。とはいえ、過ごすことのなかった場所、過ごすことのなかった方々との生活によって、物事に対する視点の多様性を考え直すことになった。」

原田眞次郎

HARADA Shinjiro

京都 2018 in 京田辺

「京都・Re-Search 2017 in 京田辺」のサーチをもとに、アーティストによる地域の新しいアートドキュメント（＝記録）を作成する、「京都 2018 in 京田辺」を開催しました。

参加アーティストは、「京都・Re-Search 2017 in 京田辺」から3名を選抜し、昨年度講師として招き、京田辺を共にリサーチした島袋道浩氏を迎え、約3ヶ月におよぶ滞在制作と、そのプロセスを京田辺市内各所で公開し発表します。



京都:Re-Search 2018 in 亀岡

参加アーティスト

安藤 隆一郎／小野 峰靖／上岡 安里／上川 桂南恵／倉科 明尚／武田 萌花／中谷 優希／原田 眞次郎

開催日時 2019年2月25日（月）～3月10日（日）

滞在場所 京都府亀岡市保津町 「心凜愛荘」

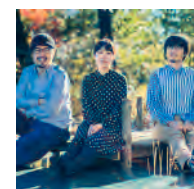
プログラム

- | | |
|------------------|--|
| 2月25日（月） | 亀岡市内にて、目【mé】によるガイダンス「アーティストにとってリサーチとは」を開催。 |
| 2月26日（火） | 目【mé】と亀岡市内をフィールドワーク。
その後、各参加者によるプレゼンテーションを実施し、目【mé】からアドバイスをもらう。 |
| 2月27日（水）～3月2日（土） | 各自の計画により亀岡市内を調査し、アートプロジェクトや作品のプランを策定。 |
| 3月3日（日） | 金澤韻によるワークショップ「地域とアートプロジェクト」を実施。※1 |
| 3月4日（月） | 中間報告を実施し、目【mé】からアドバイスをもらう。
その後、島袋道浩 × 目【mé】によるワークショップ「折り返しディスカッション」を実施。※1 |
| 3月5日（火）～3月8日（金） | 各自の計画により亀岡市内を調査し、アートプロジェクトや作品プランの構想を策定。 |
| 3月9日（土） | 参加者の作品プランやプロジェクトのプレゼンテーションによる講評会及び活動報告展を開催。※2 |
| 3月9日（土）～3月10日（日） | 参加者の活動報告展を実施。一般開放し多くの鑑賞者が訪れた。 |

※1 本プログラムでのワークショップとは、情報の交換や共有のみならず、アイデアの出し合いやディスカッションを繰り返し、各自が設定したテーマに沿ったアートプロジェクトや作品プランの実現に向けた戦略や施策などを固めていくものです。

※2 次年度、本プログラムで提案されたアートプロジェクトや作品プランをもとにした展覧会を伴うアーティスト・イン・レジデンス事業「京都 2019 in 亀岡」の開催を亀岡市内で予定しています。

講師プロフィール



目【mé】
現代芸術活動チーム

果てしなく不確かな現実世界を、私たちの実感に引き寄せようとする作品を展開している。手法やジャンルにはこだわらず、展示空間や観客を含めた状況、導線を重視。創作方法は、現在の中心メンバー（アーティスト荒神明香、ディレクター南川憲二、インストラクター増井宏文）の個々の特徴を活かしたチーム・クリエイションに取り組み、発想、判断、実現における連携の精度や、精神的な創作意識の共有を高める関係を模索しながら活動している。主な活動に、たよりない現実この世界の在りか／資生堂ギャラリー／東京、おじさんの顔が空に浮かぶ日／宇都宮美術館館外プロジェクト 2014、Elemental Detection／さいたまトリエンナーレ 2016、repetition window／Reborn-ArtFestival／石巻、などがある。



金澤 韻
インディペンデント・キュレーター、
十和田市現代美術館学芸統括

東京藝術大学大学院にて美術史および美術教育史、英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アートで現代美術キュレーティングを学ぶ。熊本市現代美術館など公立美術館での12年の勤務を経て、2013年に独立。2017年より十和田市現代美術館学芸統括としても活動。日本の近現代における文化受容の歴史への興味から、漫画、グローバリゼーション、ニューメディアアートなどを調査対象とし、「美術」領域を問い直す活動を続けている。近年の主な展覧会にKENPOKUART 2016 茨城県北芸術祭（茨城、2016）、「ラファエル・ローゼンダール：ジェネロシティ寛容さの美学」（十和田市現代美術館、青森、2018）がある。



島袋 道浩
美術家

1969年神戸市生まれ。那覇市在住。1990年代初頭より国内外の多くの場所を旅し、そこに生きる人々と動物、風習や環境に関係したインスタレーションやパフォーマンス、ビデオ作品を制作している。パリのボンビドー・センターやロンドンのハイワード・ギャラリーなどでのグループ展やヴェネチア・ビエンナーレ（2003/2017）、サンパウロ・ビエンナーレ（2006）などの国際展に多数参加。2004年から2016年まではドイツ、ベルリンを拠点にし、ドイツ、ブラウンシュワイグ芸術大学やスイス、チューリッヒ芸術大学などで客員教授を務める。著書に「扉を開ける」（リトルモア）、絵本「キュウリの旅」（小学館）などがある。

ホームページ <http://kyoto-research.com/kameoka2018>

山本昂二郎 YAMAMOTO Kojiro



閉店する町で唯一の駄菓子屋「千歳屋」の思い出話を聞いた山本は移動店舗《ファーストショップ》を仕立てた。また、市街地の美容院と新興住宅地のヘアサロンで、同じ日にそれぞれ散髪とパーマをし、日ごろ行き来の少ない両地域のコラボレーションが頭上で行われた。

《カット&パーマ》、《ファーストショップ》



1990年滋賀県甲賀市生まれ。実感がたい物事を自力で扱うことにより想像を可視化させるアクションを起こす作品を主として制作し、パフォーマンスやインスタレーション、ドローイングなどによるアウトプットを行う。主なプロジェクトに、被災地の瓦礫をリヤカーで引き回して旅する『Drag on the Router』、地理的に異質な地域の土を収集し現地でかき混ぜるシリーズ『Mixer Man』など。主な展示に、『シュレディンガーの猫』（東京都美術館／2018）など。

光岡幸一 MITSUOKA Koichi



《雲に手のとどく川》は、天井川の土手に立つと向かいの家の2階から綿菓子が届く作品。北米原産の植物名である《ポポー》は、珍しい物をみんなで食べたいと見つけた果樹だが、既にポポーを植えている人が同じ町にいた事を知り、地域との縁を結んだ。

《雲に手のとどく川》、《深く掘り下げる》、《ポポー》



マンゴーとバナナとパイナップルを足して割った様な味、プリンみたいな舌ざわり。5月に咲くチョコレート色の花。それがポポー。

よそから来た自分がよそから来た果物を育てる。京田辺の人たちはポポーを気に入ってくれるだろうか？ポポーは見知らぬ土地で元気にやっつけてくれるだろうか？



1990年愛知県生まれ。東京藝術大学大学院油画科修了。元々は建築を学んでいたが、東京の下宿先から愛知の実家まで徒歩で帰った事をきっかけに人と直接関わるパフォーマンスに興味を持ち、制作をはじめた。以降、インスタレーション、ドローイング、写真など、様々な手段を使って制作を行う。主なプロジェクトに、『上野のあるホームレスの人の壊れて放置された台車を勝手に回収して勝手に治して返す』など。

島袋道浩 SHIMABUKU



刃物になるまで磨いたパソコン「MacBook Air」でりんごを切る映像作品は、とんちがはまった時のようにスコンと小気味よい音が枯山水庭園の傍らで響いた。参道の紅葉並木を支える銀色に塗った細い笹竹を置いて、さりげなく造園のエレガントさを気づかせた。

《一休さんへ》



1969年神戸市生まれ。那覇市在住。1990年代初頭より国内外の多くの場所を旅し、そこに生きる人々や動物、風習や環境に関係したインスタレーションやパフォーマンス、ビデオ作品を制作している。パリのボンビッド・センターやロンドンのハイワード・ギャラリーなどでのグループ展やヴェネチア・ビエンナーレ（2003/2017）、サンパウロ・ビエンナーレ（2006）などの国際展に多数参加。著書に、『扉を開ける』（リトルモア）など。



横山キミ YOKOYAMA Kimi



一般公開はしていない牡丹園をテーマにした。小高い天王地区から牡丹を撮りためた古いカラーアルバムを借りうけ、1枚を引き伸ばして、作家自ら選んだ場「小さな平屋」で展示した。牡丹園で選んだ牡丹の写真や牡丹園主とのやりとりを本にし、来場者に渡した。

《天王の牡丹園》



東京を拠点に活動。「こーしー」演出担当。パフォーマンスなど創作する。嗜好品の製作、お湯として「コ」ラムの執筆など。フェスティバル・キー（2017）では「アイアム・フット・フェミスト」のステージディレクターを担当。月に1度ヴァカントにてバー会合（アイデア）を開店。ウェブサイト: newsee.co

大京都 2018 in 福知山

「京都・ReSearch 2017 in 福知山」のサーチをもとに、アーティストによる地域の新しいアートドキュメント（記録）を作成する、「大京都 2018 in 福知山」を開催しました。

参加アーティストは、「京都・ReSearch 2017 in 福知山」から2名を選抜し、昨年度講師として招き、福知山を共にリサーチした藤浩志氏を迎え、約3ヶ月におよぶ滞在制作と、そのプロセスを福知山市内各所で公開し発表します。



大京都 2018 in 京田辺

参加アーティスト

光岡 幸一／山本 昂二郎／横山 キミ／島袋 道浩

開催期間 7月6日（金）～7月16日（月・祝）（※金・土・日・祝のみの展示作品やパフォーマンスもあり）

展示会場 天津神川、東沢公園、甘南備寺 東側 平屋、酬恩庵 一休寺、京田辺市内各所 他

開館時間 9:00～17:00

プログラム //////////////////////////////////////

7月13日（金）10:00～、13:00～、15:00～	ガイド付展示鑑賞ツアー
7月14日（土）10:00～、13:00～、15:00～	ガイド付展示鑑賞ツアー
7月14日（土）	アーティストトーク 第一部：13:00～光岡幸一・山本昂二郎・横山キミ × 光田由里（美術評論家） 第二部：15:00～島袋道浩 × 浅田彰（批評家） @薪公民館（京都府京田辺市新東沢1）
7月15日（日）10:00～、13:00～、15:00～	ガイド付展示鑑賞ツアー
7月16日（月・祝）10:00～、13:00～、15:00～	ガイド付展示鑑賞ツアー

ホームページ <http://kyoto-research.com/daikyo-to-kyotanabe2018>

夏池風冴

NATSUIKE Kazayu



「鬼」についてリサーチし、パフォーマンス作品を映像化したインスタレーション作品を制作した。4 か所の展示場所は夏池の指示ではなかったにも関わらず、「鬼」で繋がり、時空間を移動する。さらに地元の人の語りが加わり、場所が立ち上がることを実感させた。

《夢の山々をめぐる》



1984年静岡県生まれ。2009年京都市立芸術大学大学院美術研究科漆工専攻修了。写真や映像など様々な素材を使用しながら、想像力の境界についての作品を制作。主な個展に「月がついてくるように」(同時代ギャラリー、京都、2017)、「個別のまぼろし」(KUNST ARZT、京都、2014)、「繁る森の外」(Gallery PARRC、京都、2014)などがある。



池永梨乃

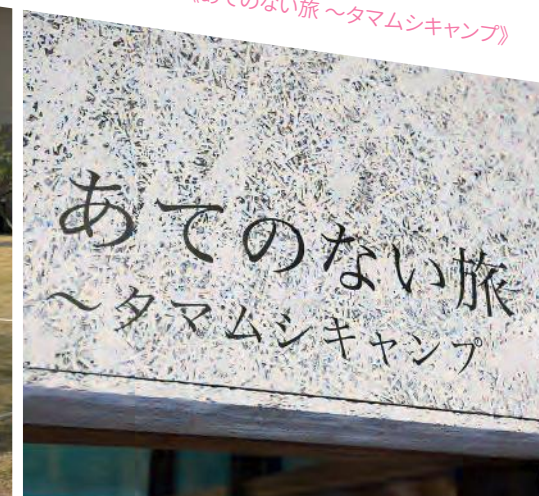
IKENAGA Rino



長期的に福知山に身を置き、住民とは異なる生活者の視点としてタマムシに姿を変え、生活とパフォーマンス作品を一体化させようと試みた。これまで人工的な都市開発と自然、人と自然、アートとマチなどの相反するものをテーマとしてきた池永らしい作品となった。



《あてのない旅 ～タマムシキャンプ》



1992年大阪府生まれ。同志社大学美学芸術学科卒業。中欧遊学時にスイス人ペインターのハンズ・クレーンマン氏に絵心を教えてもらう。絵画、演劇、写真、パフォーマンスなどの表現手法を柔軟に交差させながら自然と文明の境界線を問い、現代に生きる人が持つ深層心理のイメージを表現する。

大京都 2018 in 福知山

参加アーティスト

池永 梨乃／夏池 風冴／藤 浩志 & 2/2

開催期間 11月2日（金）～11日（日）

展示会場 ゆらのガーデン、柳町、シンマチサイト、酒呑童子の里体育館、旧旅籠板文、かしの木台ホール、仲の湯、福知山城、福知山市内各所 他

開館時間 9:00 ～ 17:00

プログラム

11月2日（金）16:00 ～ 11月4日（日）9:00	ボートハウス__福知山の家と船
11月3日（土）10:00 ～	ガイド付まちなか展示鑑賞ツアー
11月3日（土）15:00 ～	アーティストトーク @ 福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎（京都府福知山市字上新7） 藤浩志 × 地元のみなさん
11月4日（日）10:00 ～、14:00 ～	ガイド付まちなか展示鑑賞ツアー
11月4日（日）11:00 ～	勝手にファッションショーしながら歩く作品鑑賞ツアー by いろいろやってみる部
11月9日（金）16:00 ～ 11月11日（日）9:00	ボートハウス__福知山の家と船
11月10日（土）10:00 ～ 12:30、13:30 ～ 19:00	ガイド付まちなか展示鑑賞ツアー（午前）+夢の山々を巡るバスツアー（午後）
11月11日（日）10:30 ～ 12:00	こどもツアー（山山こどもアート学校）
11月11日（日）15:00 ～	アーティストトーク @ 古本と珈琲 モジカ（京都府福知山市中ノ28-3） 池永梨乃・夏池風冴 × 小田井真美（AIR ディレクター / 文化芸術事業設計）

ホームページ <http://kyoto-research.com/daikyoto-fukuchiyama2018>

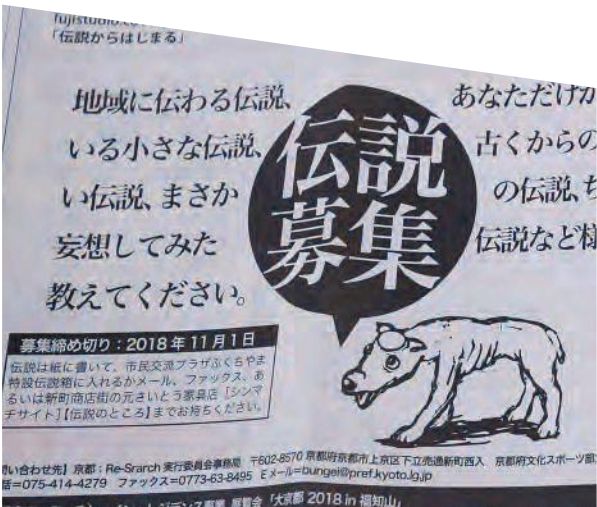
藤浩志 & 2 / 2 fujistudio.co



作品を介在させることによって、マチの姿に焦点をあてようとした彼らは、捨てられていたモノや、伝説を元にしたドローイングなどをインスタレーション作品として発表した。それは、マチの断片を繋ぎ合わせて、またマチになるというような仕掛けにも見えた。



《伝説からはじまる》



美術活動におけるツール・システム・空間全般の研究、企画、制作、運営を行う組織。1992年設立の藤浩志企画制作室を前身とし、2017年5月 fujistudio.co として再スタート。鹿児島島の「イイテラ」へ、糸島の「うみかえる」、秋田の「旭スタジオ」などを拠点に、さまざまな人との関わりの中から立ち上がる「のっそりとした」活動を模索する。「Kaekk」
「povplanetjocenny」
「nuee-audience」
「ふんが」
「かて」
「ふんが」
<https://www.fujistudio.co>

京都:Re-Search フォーラム 2018

地域と向き合う

～アーティストのサーチ～

開催日：2019年1月12日（土）

時 間：13:00～17:30

会 場：京都文化博物館 別館

取組報告

「京都・Re-Search 2018 in 京丹後」
「大京都 2018 in 京田辺&福知山」
報告者／八巻真哉（京都府文化スポーツ部文化芸術課）

第一部

パネルディスカッション

「地域と向き合う」アーティストのサーチ」

パネリスト／SIDE CORE（アーティスト）

目【m é】（現代芸術活動チーム）

モデレーター／島袋道浩（美術家）

まず、モデレーターの島袋道浩氏から「アーティストにとってサーチ」とは何かという説明があった。島袋氏の解釈では、歴史的にひもとくと、かつてセザンヌがサント・ヴィクトワール山に向いて制作を行っていたように、昔からアーティストがその現場でサーチをして、作品制作を行っていたという。そして島袋氏自身がなぜサーチを元にした作品の制作や発表をしているかというと、レジデンスしている場所で、そこにあるものを使ってそこにいる人々と作品を作りたい、このことが自分にしか出来ないと思うからだ、という。例えば、以前島袋氏がオーストリアのシュワッツのアートセンターに滞在してサーチをした際、2000メートル級の山がたくさん並んでいるにも関わらず、今なおその辺りでは貝やイルカの化石が取れるということを知った。オーストリア滞在の直後に中国の北京へ行った島袋氏は、魚やタコの形の風を手に入れてオーストリアのシュワッツに戻り、その風を揚げるという作品を発表した。土地の歴史を再確認するだけでなく、オーストリアと中国という国境を超えるイメージも提案できた作品となった。島袋氏は「こうしたアーティストがサーチをして作

「新たな風土の発見」をテーマにした、アーティスト・イン・レジデンス事業「京都・Re-Search」「大京都」を府内各地で取り組んでいく。これは、府内各地に眠る「タカラ」を掘り起こし、アートの「チカラ」を介して、新たな価値観の発見や発信へと繋ぐ、地域の文化資源を生かしたプログラム。アーティストの目や力を通して、地域を観察し、地域主体で文化芸術活動に関わる環境づくりを促進し、地域のポテンシャルや魅力をアートの視点から引き出していく。

本フォーラムでは、アーティストのサーチについて、また、その成果物としての作品やそのプロセスは地域に何をもたらすのかについて議論が深められた。アーティストたちが作品をつくるにあたり、「サーチ（＝思考）する」とは、自分自身は歴史や社会など、自分をとりまく様々な事象をとらえているのか、ということを見つめる機会である。未知のものに対しオープンマインドで関わるしなやかな態度、またサーチの結果、光をあてたり、発掘したりしたものを組み合わせる編集するやり方は、実に示唆に富んでいる。今日におけるアート、アーティストからの地域のサーチ（＝思考）による作品制作の特徴や意義について考察された。

品を作ることは、アトリエやスタジオにいたら出来ないことであり、自分にしか出来ないことがある」ので続けているという。

続いて、パネリストの目【m é】から、これまでサーチを元にした作品2点について、経緯とともに紹介があった。1つは、2018年に宮城県石巻市のイベント「リボン・アートフェスティバル」で発表した作品についてである。東日本大震災直後から現地をサーチしていた彼らが制作したのは、復興していく街を体感できる作品で、その制作プロセスや来場者からもらった感想を語った。もう1つは、栃木県にある宇都宮美術館で発表した大きなバルーン型の作品についてである。目【m é】のメンバーが見た夢を元に、顔が描かれたバルーンを浮かべ、町のどこからでもそれが見られるという作品であった。地元の人達とどうやって関わったか、宇都宮市内に住む男性の顔を選ぶまでの苦労話といった、制作過程について話をした。

そしてもう1組のパネリストであるSIDE COREから、同じく「リボン・アートフェスティバル」で発表した、宮城県内の工事現場用品専門店とコラボレーションした作品について紹介した。SIDE



COREが展示会場にしていたローラースケート場が途中から使えなくなったような、地域の人達と関わることの難しさや、リサーチした場所や発表した作品はやがて別の場所にも繋がることに気付くなど、リサーチに基づく制作、作品の多様性を説明した。

第二部

パネルディスカッション「地域とA・Rとアートプロジェクト」

登壇者／小田井真美（さっぽろ天神山アートスタジオA・Rディレクター）、

菅野幸子（A・R Lab アーツ・プランナー／リサーチャー）、

藤浩志（美術家）

モデレーター／大澤寅雄（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室／文化生態観察）

最初に、第一部の話を受けて、登壇者それぞれの感想を交換した。モデレーターの
大澤寅雄氏は、アーティスト・イン・レジデンスは、自身が行う調査・研究とは異なり、リサーチ自体が作品になるという前提があること、地域にもたらずものやプロジェクトに対して、アーティスト側と地域側では誤解や裏切りが起こるという話があった。パネリストの小田井真美氏から、アーティスト・イン・レジデンスは短時間で制作をするためのリサーチや制作の場ではなく、長い時間を掛けてその場所や出来事と関わるためのプログラムになって来ているとのこと。また、パネリストの菅野幸子氏は、海外と日本におけるアーティスト・イン・レジデンスの意味や意義の違い、必ずしもアーティストに対して何か結果を求める必要はない、むしろアーティストにとっても、地域の人にとっても、お互いこれまで知らない視点をもたらすことが面白い点であると指摘した。パネリストの藤浩志氏は、アーティストとしての立場でアーティスト・イン・レジデンスに参加し、

ティスト・イン・レジデンスやアートプロジェクトが日本各地で行われることで、アーティストと地域が向き合い、お互いにもたらずもの、もたらされるものがあり、それらを交換することで厄介なこともあれば楽しいこともあると説明した。小田井氏は、アーティスト・イン・レジデンスが生ものであるからこそ、良き方向に転がるようにしたい、そうするとアーティストも地域も何かを得ることが出来ると話した。菅野氏は「京都・Re・Search」といっても北と南では文化も気候も違うからこそ、きちつとリサーチを位置づけてアーティストが作品制作できるアーティスト・イ

作品を制作・発表することはその地域に新しい価値をつくることである、と説明した。

そして来場者も交えて、アーティスト・イン・レジデンスの体験・経験で起こった事例を発表し、共有した。例えば、制作・展示をした際に出たクレームとアーティスト、コーディネーターの関係性について。あるいは、リサーチがない上で地域と関わり、アーティストが作品制作をする大変さやそれをコーディネートするコーディネーターについて。これらは地域を問わず起こりうる問題ではあるし、担当者の考え方に依る部分ではあると同時に、地域とアーティストの関わりを考える直すきっかけにもなることである。

こうした問題点を踏まえて、第一部のパネリストであるSIDE COREや目【m é】のメンバーも、地域とアーティストの関係性について体験談を語った。

さらに、地域で長年アーティスト・イン・レジデンスをしている来場者から、最近の事例や運営方法などが発表された。

最後に、登壇者それぞれが全体を通した感想を述べた。大澤氏は、ア

ン・レジデンスにすべきだと提案した。藤氏は、アーティストが地域に増えて、もっと何かしていく人が増えたらいいと述べた。